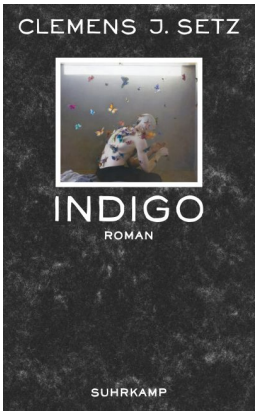
クレメンス・Ｊ・ゼッツ『インディゴ』訳本制作騒動記（A. Inukai）[J]

文学過激派、クレメンス・Ｊ・ゼッツ

オーストリアの作家クレメンス・Ｊ・ゼッツ（1982 年グラーツ生まれ）の小説『インディゴ』が、2021 年 6 月、彼の作品のなかで初めて日本語訳として刊行された。ドイツ語圏では近年、彼の著作が次々と発表されていくなかで、その仕事の全体像が次第にひろく認知され、評価が高まってきたようだ。彼の文学賞受賞のニュースはもともと途切れることがないが、ここ数年はドイツ語圏でもっとも権威あると言われる賞を立て続けに獲ることになった。

2020 年クライスト賞に選ばれたとき、文芸批評家のダニエラ・シュトリグルはゼッツのことを「よい意味での文学過激派」と呼び、「アナーキーな空想と痛快さで常に読者を唖然とさせている」と選考理由にしたためた[1]。2021 年 7 月に出されたビューヒナー賞選考委員会のプレスリリースによれば、「ときに不穏な彼の苛烈さは深く人間的な衝動を追いかけているがために、われわれの現在の核心を突いている」[2]。さらに 2019 年ベルリン文学賞は「すべてのジャンルに独自のアクセントをつけた彼の創作」に対して贈られるもので、ゼッツは「文学の伝統を前衛文学の形式的な成果へと強烈に結びつけており、それゆえに彼の創作は広く若い読者にも魅力あるものになっている」[3]。どの評価からもうかがえるのは、ゼッツの驚異的な独創性と、同時代性や伝統に根差した正統性だ。

エルンスト・ヤンドルの具象詩から読書をはじめたというゼッツは、ダダイズムなどの詩的言語を好み、文学ジャンルを横断して新奇性のある書籍を次々と作りだす。芸術家たるもの、既存の型を破るような本を作らなければおもしろくないが、型の破りかたには個性があらわれる。ここではあえて内容には踏み込まず、書籍のデザインのみに焦点を絞って、小説『インディゴ』を日本語へ「翻訳」した制作チームのご苦労の一端を、2021 年 7 月に開催されたオンライン刊行記念トーク[4]の内容を交え、翻訳者の立場からご紹介させていただきたい。



装幀

小説『インディゴ』は、内容もさることながら、装幀やページデザインにも魅力がある。ドイツ語原書の装幀、そして後に言及するページデザインは、作家としても活躍する装幀家ユーディット・シャラン

---

[1] https://www.heinrich-von-kleist.org/kleist-gesellschaft/kleist-preis/
[2] https://www.deutscheakademie.de/de/akademie/presse/2021-07-20/vvv
[3] https://www.deutsches-stiftungszentrum.de/download/file/fid/1952
[4] 『インディゴ』 刊行記念トークイベント　著者 クレメンス・J・ゼッツ、訳者 犬飼彩乃を迎えて（ゲーテ・インスティトゥート東京主催、メルク社後援）2021 年 7 月 3 日、Zoom にてオンライン開催

スキーが担当しており、表紙にはバインダーファイルでよく使われる厚紙（Wolkenmarmorpapier）が採用されている。これは書籍そのものをファイルと見立てることで、資料の断片の集合である本小説の特徴をよく表したものだ。作品に並々ならぬこだわりを見せるゼッツだが、シャランスキーの仕事に注文をつけることはなかったという。これは以前きいた彼の挿絵入り短篇集での画家への態度と同じで、ゼッツは相手の仕事を尊敬し、口は出さないことにしているという。

日本語版では、本文のページデザインを編集者と訳者が行い、ほぼ出来上がったところで水戸部功さんに装幀をご担当いただいた。編集者さんの助言もあり、作家を見習って何も注文をつけずに待った。はじめは国内最高峰の装幀家に手がけていただけるだけで感激していたのだが、その浅い感激はまもなく大きな驚きに塗り替えられた。銀と黒のコントラスト、宇宙、鏡文字、そしてカバーを広げると現れる作家の現身……。一筋縄ではいかない小説を深く理解しなければ不可能なデザインだ。各国語版『インディゴ』の表紙にはインディゴブルーが使われているものも多いが、不穏さを醸しだす黒が基調になったこともとても嬉しい。

著者プロフィール

このカバーについては、原書の再現が困難だった箇所がひとつだけある。それは裏表紙袖にある著者経歴欄だ。ここは読者が本書を手に取るときに最初に目にする情報のひとつなので、もちろん気合を入れてテクストを用意していた。原書にあるプロフィールと、訳者側で準備したプロフィールの二種類だ。

実は『インディゴ』は、作家と同名の人物クレメンス・J・ゼッツが主人公の小説である。そして原書冒頭奥付にある著者経歴欄には、この登場人物ゼッツのプロフィールしか書かれていない。本物のゼッツの経歴は本書のどこにも記載されていないのだ。つまり、この書籍全体が、のちに作家になったとされる架空の登場人物ゼッツによって書かれた創作物、という設定である。原書では自分の手元に実在する書籍は架空の人物によって書かれた架空の存在だが、現実として手に取ることができる、という不可思議な状況ができあがる。

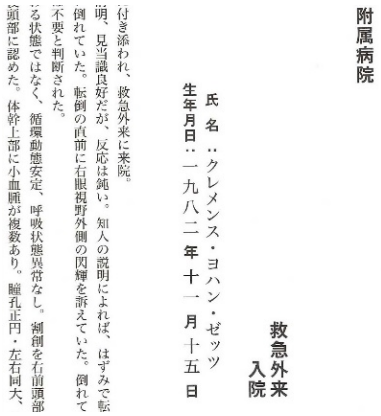
この虚実の混交は本小説の要諦のひとつなので、私は訳者として、実在の作家のプロフィールを裏表紙袖に入れるならば、架空の主人公のプロフィールは表表紙袖へ入れることを提案した。奥付やあとがきといっしょに裏表紙袖をチェックして購入したあと、読み始めようと最初のページをひらくときに、末尾にあるのとは異なる経歴が目に入る仕組みである。ただこれは希望がかなわなかった。どちらが正しい経歴か一目でわからないと図書館やデータベース会社のご迷惑になるからと説得されてしまえば、あきらめざるを得ない。書籍のカバーは芸術であると同時に重要な出版社の販促ツールであり、図書館にとっては書誌情

報源なのだ。この点に関しては、作家本人からも翻訳ではうまくいかないことが多く、特にその言語で一冊目の場合は、かなりむずかしいと聞いていた。残念だが日本語版もその例外となることはできず、原書にある架空の経歴を訳したものは、「日本語版への序文」のあとにくる文章から原書の全訳が始まると考えて、６頁に収録されることになった。

この話にはさらに続きがある。オンライン刊行記念トークでは、この架空のプロフィール以外にも、裏表紙も細工を希望していたことが作家の口から明かされた。日本語版では帯に書かれる推薦文は、ドイツ語の書籍では裏表紙に掲載される。ゼッツはこの文も自分で書こうとしたらしい。しかも推薦文どころか、「この本は虚言ばかりを流布している」「この作家はインディゴ文化をまったくわかっちゃいない――『ゾーン・アート・マガジン』」など悪評ばかりを並べようと提案したのだという[5]。さすがに出版社もこれは断り、本を買う人はそんなにじっくり表紙を見ないからと言われて作家も納得したという。日本語版の制作にまわった人間からすると、そこまでやってくれなくて本当に助かったと思うばかりである。

フォントとページデザイン

次に本を開いて目に飛び込んでくるのは、フォントとページデザインの異様さだろう。読めない目次、個人的な手紙や大学病院の診断書からスタートし、さまざまに集められた断片的な資料の束である本小説は、先述したユーディット・シャランスキーのデザインによって各ページが別々の資料として演出されている。おかげで訳文を活字に組む段階になってすぐ、ご担当いただいた国書刊行会の清水範之編集長より、編集人生 25 年のフォント最多記録をあっという間に更新しました、とお電話があった。文芸作品で使われるフォントはせいぜい 5 種類ぐらいだそうだが、今回の日本語版には 15 種ほどが使用された。


附属病院

救急外来入院

氏名：クレメンス・ヨハン・ゼッツ
生年月日：一九八二年十一月十五日

行き添われ、救急外来に来院。
明、見当識良好だが、反応は鈍い。知人の説明によれば、はずみで転倒れていた。転倒の直前に右眼視野外側の閃輝を訴えていた。倒れて不要と判断された。
る状態ではなく、循環動態安定、呼吸状態異常なし。創創を右前頭部頭部に認めた。体幹上部に小血腫が複数あり。瞳孔正円・左右同大、

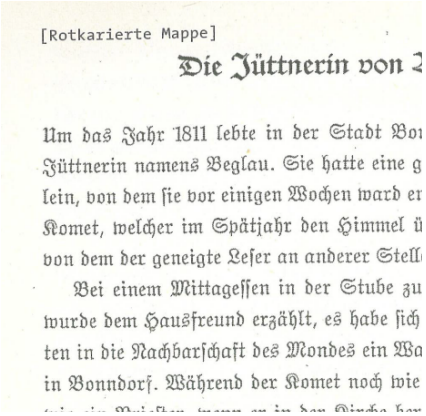
この実験がなかなかの現場泣かせだった。まず、なぜそのフォントやデザインが使われているのかをテクストの内容からひとつひとつ探らなければならない。ページごとに変わる想定上のテクスト執筆者や、執筆年代、テクストのジャンル、手書きメモ・書籍コピーの挿入などテクストの生成過程や想定される紙面の違いなどを読み取ったうえで、日本語のどのフォント、どういうページデザインが近い印象を出せるかと考える。そこへ日本語の、または日本の文芸小説の慣習が

---

[5] このアイディアは、20 代半ばに読んだアメリカの作家デイヴ・エガースの以下の回想録から刺激をうけたものだという。この本にはあらゆる箇所に細工や仕掛けがあり、かっこいいと思っていたそうだ。
Dave Eggers: A Heartbreaking Work of Staggering Genius. New York: Simon & Schuster, 2000.
［デイヴ・エガース『驚くべき天才の胸もはりさけんばかりの奮闘記』（中野恵津子訳、文藝春秋社　2001）］

立ちはだかる。たとえば章ごとのフォントの違いは、編集者さんがフォント見本とくびっぴきになって校正を何度もかけてくださったが、日本語版ではどうしてもドイツ語版ほどすっきりとはページの違いが出なかった。また冒頭に挿入されている大学病院の診断書は、リアルなものを追求するなら、本来は日本語でも医学界の慣習にあわせて横書きにすべきだったかもしれない。しかし小説の慣習である、縦書き四六判の一ページに横書きでおさめるにはオリジナルの診断書は情報量が多すぎた。紆余曲折の末、最終的には見開き二ページに縦書きでデザインしていただくことになった。氏名や日付欄のフォントの違いやその前後の微妙な空き具合などは、医師が既定のひな型にあとから打ち込んだように見せる職人的な制作陣のこだわりなので、訳文とともにぜひご笑覧いただきたい。

小説のなかには実際に存在する書籍からコピーしたように演出されているページもある。たとえばJ・P・ヘーベルの『カレンダーゲシヒテン（暦物語）』（日本語版 99 頁）である。ドイツ語版（S.80-81）ではフラクトゥールが採用され[6]、本来『暦物語』には存在しない銅版画が貼られている。これは真正のオリジナルテクストからの抜粋に創作を混ぜ込んだ作家いわく「パスティーシュ」だ。ここで「翻訳」しなければならなかったのは、「テクスト内容」のほか「古めかしさ」「読みにくさ」「本文とは別のファクシミリコピーが挿入されている演出」だ。本小説にはこのようなコピー挿入風のページがほかにも数か所ある。この訳文以外の「翻訳」のほとんどは出版社の制作チームが担ってくださった。

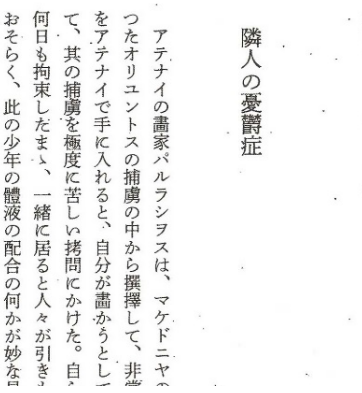

[Rotkarierte Mappe]

Die Jüttnerin von

Um das Jahr 1811 lebte in der Stadt Bo
Jüttnerin namens Beglau. Sie hatte eine g
lein, von dem sie vor einigen Wochen ward er
Komet, welcher im Spätjahr den Himmel ü
von dem der geneigte Leser an anderer Stell

Bei einem Mittagessen in der Stube zu
wurde dem Hausfreund erzählt, es habe sich
ten in die Nachbarschaft des Mondes ein Wa
in Bonndorf. Während der Komet noch wie

こうした箇所について、私がもっともよくお願いしたことは、「読みにくくしてください」ということだった。現実に比較的新しい日本語訳が出ている『暦物語』はリアルさを優先してそこまで読みにくくしなかったが、『憂鬱症の解剖』のページ（130-131 頁）は、1936 年版の明石譲寿訳を参考にして旧字体を使った少々古めかしい文体で制作している。ところがこれを活字に組んでみると、違和感を覚えるほど美しく読みやすかった。紙の質、フォントデザイン、インクにじみの無さなど、こんなに現代の印刷技術は進化しているのかとあらためて驚くばかりだ。とにかく読者をいくらかでも騙して古いものに見せるには視認性が良すぎると、旧字体の


[赤いチェックのファイル]

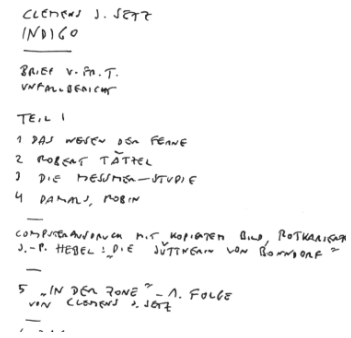
隣人の憂鬱症

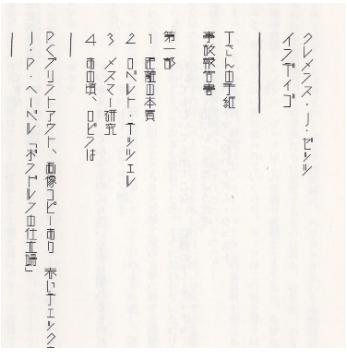
アテナイの畫家パルラシヲスは、マケドニヤの
つたオリユントスの捕虜の中から撰擇して、非常
をアテナイで手に入れると、自分が畫かうとして
て、其の捕虜を極度に苦しい拷問にかけた。自分
何日も拘束したまゝ、一緒に居ると人々が引き
おそらく、此の少年の體液の配合の何かが妙な

[6] シャランスキーは、その名も『フラクトゥール、モナムール（私の愛）』という、300 書体以上のフラクトゥールを収集した書籍を出版しており、これには 100 セットの使用可能なフラクトゥールが入った CD-ROM までついている。ゼッツもフラクトゥールが装飾的で好きだという。
Judith Scharansky: Fraktur mon Amour. Mainz: Hermann Schmidt, 2006.

量を大幅に増やし（朱入れが多く大変なことになった）、文字の解像度を粗くしていただいた。その他ページ全体を縮小して印刷するなどドイツ語版で行われている演出を模倣したほか、日本語版ではさらに図書館の古いコピー機で複写したかのような印象を出そうと、ページ全体をすこし汚してみた。これはフォントだけでは違いがわかりにくかった挿入ページを原書のようにほかのページから際だたせるためのアイディアだ。

校正で最後まで残ったのは、くせの強い目次のデザインだ。原書は判別が不能な手書きの大文字ブロック体で、文字が小さいばかりかページ数表示もなく、正直に言って目次の役割は果たしていない。その上「嵐に吹き倒された小屋のよう」（256 頁）で、文字と文字がくっついて「ミニマリズムの壁紙模様みたい」（446 頁）という本文中にある主人公ゼッツの手書き文字の形容にふさわしいものを案出しなければならなかった。しかし文字とはそもそも読まれるためにあるのだから、読みやすさはフォントデザインの必要最低条件のはずだ。それがわかっていながら、男性的でなおかつ異常性が感じられ、読めないフォントが必要だと、酷な要求をすることになった。インターネット上で提供されているフォントなどは使えないものも多いと知って諦めかけたころ、なんと見事に目当てのものを探し出していただいた。編集者さんも初めて知ったという「TA 方眼」というフォントだ。ほかの書籍も担当されてお忙しいなか、親身になって粘り強く探していただき感謝の言葉もない。





<u>さいごに</u>

小説『インディゴ』には、書籍のデザインひとつをとってもさまざまな「文学過激派ゼッツ」の要素が詰まっている。本文にももちろん独特な仕掛けが見られる。奇才のアイディアを鑑賞するだけなら楽しいが、それに右往左往させられる制作現場のご迷惑は計り知れない。すこし聞いただけでも、書籍からの架空のコピー挿入が入るたびにノンブルが途切れるので、製版の現場で大変だ！と騒ぎになり、製本の段階では、水戸部さんがデザインされた本扉が裏だけに印刷されているので危うく表裏逆に綴じそうになり、見本を刷ってみれば汚れているページがあるので刷り直しだ！と差し戻されそうになり、と常にお騒がせし続けたようだ。関係者のみなさまには作者に代わり、また訳者の不手際も含めて深くお詫び申し上げたい。それでも本書が無事に刊行できたのは、どのような事態にも根気強くつきあってくださった編集担当の清水範之さん、校正さん、ＤＴＰさん、印刷所さん、そして装幀を手がけていただいた水戸部功さん、ここでは言及しなかったが凄みのあ

る推薦文をいただいた円城塔さん、山本貴光さん、もちろん「かけはし文学賞」という貴重な出版の機会をくださったメルク社、ゲーテ・インスティトゥート東京、国書刊行会のみなさまほか多くの方のご尽力、お力添えの賜物にほかならない。この度はみなさま本当によくお世話になりました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

犬飼彩乃（東京都立大学）

0182
作成日：2021/09/02